

サッド・ムービー

2006(平成18)年11月12日鑑賞(敷島シネポップ)

★★★★



監督=クオン・ジョンガン/出演=チョン・ウソン/イム・スジョン/チャ・テヒョン/ソン・テヨン/イ・ギウ/シン・ミナ/ヨム・ジョンア/ヨ・ジング (ギャガ・コミュニケーションズ配給/2005年韓国映画/109分)

……4組の男女の別れの物語が、オムニバス形式ではなく、有機的に結ばれながら展開していく。それをリードするのは韓国のイケメン俳優チョン・ウソンと別れさせ屋のチャ・テヒョン。そして登場する4人の女優は美形ばかり……。死亡によるつらい別れ2例を含めてまさに『サッド・ムービー』のオンパレードだが、実はそのタイトルとは裏腹に、再生や希望の芽が見えるところがミソ。チェ・ジウを代表とする従来の「泣きの韓国映画」に、「異質な泣き」を注入したことに注目しながら泣いてみては……？



4つの物語と聞いていたが……

私の事前情報では、この映画には4組の男女が登場し、4組の男女の別れの物語が描かれる、ただし1組は母親と息子の物語らしい、だから、タイトルは文字どおり『サッド・ムービー』というものだった。その事前情報はまちがっていなかったが、私が勝手にオムニバス形式による4つの物語と理解していたのは大きなまちがいがだったことにすぐに気がついた。すなわち、この映画は1本の映画の中に8人の主人公を登場させ、ほぼ平等に4組のカップル(?)の別れの姿を描いているわけだ。

登場人物が多くなると話がややこしくなりわかりにくくなるのは、『オーシャンズ11』(01年)や『オーシャンズ12』(04年)を観れば明らか。そのうえ、韓国の女優はみんなキレイだが、名前と顔と過去の登場作品が一致するまではみんな同じような美人顔でその識別がつきにくいから大変……？ しかし、この映画に

限っては、そんな心配は無用だった。2時間弱で収めなければならないから、物語の転換が早いのは当然だが、そこには全然違和感がなく、同時並行的に進んでいく4つの物語は十分に理解可能……。

チョン・ウソンの役柄は……？

『武士 (MUSA)』(01年)、『私の頭の中の消しゴム』(04年)、『トンケの蒼い空』(03年)、『デイジー』(06年)などで大人気となったチョン・ウソンがこの映画の一方のメインだが、彼が演じる役柄は消防士ジヌ。ジヌは使命感いっぱいの消防士だが、恋に関しては不器用で、彼のプロポーズを待っている手話通訳アナウンサーのスジョン (イム・スジョン) はいつもイライラ。スジョンはジヌがある火事の現場で救出した女性スウン (シン・ミナ) の姉。この救出劇の後でお姉さんとの恋が芽生えたわけだ。

任務に忠実な消防士という役柄から、私はジヌがついついか殉職死してしまうのではと心配してしまっていたが、スジョンの心配もそれと同じ。スジョンは消防車のサイレンの音を聞くとハッとすると、天気予報の手話通訳をしていても晴れの日が続くと火事が心配になるという毎日。そのため、ジヌに対する彼女の気持は、一度は切れかけたことも……。

そんなスジョンのかけがえのない大切さに気づいたジヌは、遂にプロポーズの決意をし指輪を渡そうとしたが、さあ映画はこんな2人の「サッド・ムービー」をどのように描くのだろうか……？

チャ・テヒョンの役柄は……？

この映画のもう一方のメインは、『猟奇的な彼女』(01年)、『僕の彼女を紹介します』(04年)、『僕の、世界の中心は、君だ。』(05年)等で大人気となったチャ・テヒョン。

彼が演ずる役はジヌと好対照に、3年間も職にありつけず、ボクシングの殴られ役のバイトをして稼いでいるダメ男ハソク。ハソクはスーパーのレジ係をしている女性スッキョン (ソン・テヨン) との交際が3年間続いているが、彼女は、将来性がないうえ、将来性がないことを認識せずノー天気な生き方を続けている

ハソクに対してそろそろ見切りをつけようとしている様子。スーパーのレジを挟んでそんな痴話ゲンカ(?)をされたのでは、後ろに並んでいる客は大迷惑……。

しかし、今ドキの若者は何なりと自由に仕事を探すもの。ある時、公衆電話でスッキオンから「私の知り合いだということで、私の代わりに別れの言葉を伝えてくれ」と頼まれたことがきっかけとなって、「別れさせ屋」の仕事を思いつき、インターネットで広告するとその需要があったからビックリ。ちょっととぼけた雰囲気のアソビにはそんな仕事がピッタリだったのか、意外にその仕事は順調に発展。もっとも、暴力のために別れたいという女性からの別れ話を相手のヤクザに伝えるケースでは大変だったが……？

さらに悲しいことに、アソビは最後には鏡に映った自分に対して、スッキオンからの別れ話を伝えざるをえない羽目に……。

聴覚障害のスウンはヤケド痕も……

スジョンが手話通訳をしているのは多分、妹のスウンが生まれつき聴覚障害を持っていたせい……？ そのスウンは「あの火事」でジヌによって命は救われたものの、左頬に手のひらほどのヤケド痕が残ることに……。年頃の女の子にとって、それは致命的。彼女はお姉さんのスジョンとジヌとの恋愛を応援する快活で明るい女の子だが、さてそのホントの心の中は……？

スウンの仕事は、遊園地で着ぐるみを着てお客さんを楽しませること。これなら顔のキズも聴覚障害もオープンにならないから、まさに彼女にピッタリの仕事……？ そんな彼女が恋をしたのが、いつも遊園地で似顔絵描きをしているかわいい美術学生のサンギユ（イ・ギウ）。何やかんやと世話を焼いてくる着ぐるみの女の子は、なぜかしゃべらないし、なぜか素顔を見せないが、きっとかわいい女の子に違いない！ そう考えた彼は、スウンに「君の似顔絵を描きたい」と願ったが……。

サンギユがパリに留学する前に、着ぐるみ仲間たちがスウンのためにセットした1日だけのデートは、これまでの映画にはないパターンだが、こちらあたりで観客席のあちこちからはすすり泣きの声が……。

このカップルだけ異質？ 泣かせの子役が登場！

キャリアウーマンとしてバリバリ働くのもいいが、その反面、母親として子供に接する時間が短くなり、アレコレの問題を引き起こす例は多い。この映画の4番目の物語は、そんな女性ジュヨン（ヨム・ジョンア）と小学2年生の息子フィチャン（ヨ・ジング）とのサッド・ムービー。

どうも最近息子の様子がおかしい、学校の先生からそう聞かされたジュヨンはハタと考えざるをえないが、その原因はきわめて明快。母と息子が共に過ごす時間の問題だ。そりゃいつも独りぼっちで食事をし、雨の日にも迎えに来てくれない、そして母親たちが交代で行っている横断歩道での交通整理にも参加してくれない母親に対して、子供が不満を持つのは当然……。

ある日、ジュヨンは車の運転中激痛が走り交通事故を起こしてしまったが、事態はそれ以上に悪いもの……。

検査の結果、ジュヨンはガンであることが判明したのだった。もちろん、そんなことだとは知らないフィチャンは母親と接する時間をタツプりとれるようになったため、母親の入院を大歓迎……？ ところが、ある時、ある不用意な会話からそれと知ってしまったフィチャンは……？

このフィチャンを演ずる少年ヨ・ジングは今回が演技初挑戦とのことだが、観客を泣かせるにはやはり天才的な子役が1番……。雨の中、「お母さんの命を助けて。もう2度とわがままは言わないから。きっといい子になるから……」と叫び続けるフィチャンの姿に、観客席は一斉に……。

映画的に面白い（？）のは、このジュヨンとの別れのシーンになぜかハソクが登場し、別れの言葉を述べること。もっとも、これには賛否両論あるかもしれないが……？

^{タイトル} 看板に偽りあり……？

この映画は、たしかに^{タイトル}看板どおり4組のカップルの別れを描いたもので、それぞれの物語でしっかりと観客を泣かせるように仕組まれている。しかし、しかし……。

所詮この世は人間の営みだから、人間の命に限りがあるのは当然だし、夫婦・親子の間にも別れがあるのは当然。そして、男女の恋愛にも、成就するものと、それが叶わず別れてしまうものの2つのパターンがあるのは当然。したがって、「別れ」そのものは必ずしも悲しいものではなく、必然的なもの……。

4つの物語の中でも死亡による別れ、すなわち、①ジヌが消防士としての任務を遂行中、殉職死すること、②ジュヨンが思いがけないガンで、幼い息子を残してこの世を去ってしまうことの2つがより悲しいもの。しかし、この映画は多分意図的に、その悲しさを描くばかりではなく、死亡によって失ったことから逆に見えてきたものや得られたものを観客に示していく。したがって、悲しいはずのスクリーン上の物語を観ている私たちの心の中には、どうしようもない悲しみだけではなく、同時に再生や希望の気持も……。

他方、③サンギユとスウンの別れは、もともとスウンがそれ以上のものを求めないという意思がはっきり示されているため、別れ自体が1つの望ましい到達点ともいえるし、場合によればパりに旅立ったサンギユが再びスウンを迎えに来るかもしれないという可能性も……。また④ハソクとスッキョンの別れは、ハソクのダメキャラや天衣無縫な明るさが見えているだけに、悲しみよりもこれからの楽しみの方が大きく思えるほど……？

このように考えれば、この映画はたしかに観客の涙を誘うサッド・ムービーだが、その実、失ったものに代わる喜びや新たな希望を与えているのでは……？
そしてそう考えると、この映画は看板に偽りあり……？

2006(平成18)年11月13日記